

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024年9月23日(月)

活動隊員：網木政江

1. 活動期間

2024年9月17日(火) 8時00分～2024年9月19日(木) 17時00分

2. 活動場所

仮設住宅：正院町第1団地(珠洲市立正院小中学校・石川県珠洲市正院町川尻1部39番地)

宝立町第1団地(珠洲市立宝立小中学校・石川県珠洲市宝立町鶴飼丑部83)

蛸島町第6団地(蛸島港・石川県珠洲市蛸島町ネ)

避難所：珠洲市立大谷小中学校(石川県珠洲市大谷町1字78番地)

在宅 珠洲市宝立町、大谷町、馬縹町、笹波町

3. 石川県珠洲市の被害状況(9月17日14:00現在 石川県庁情報第160報)

人的被害 死者：126人 うち災害関連死：29人 負傷者：重傷47人、軽傷202人

住家被害 建物全壊・半壊・一部破損：5,541棟、非住家被害：5,985棟

避難所開設数：15箇所 避難者数145人

通水率：4,252戸/4,585戸(92.7%)

(9月12日 令和6年能登半島地震災害看護プロジェクト会議情報)

4. 支援活動の実際

< 応急仮設住宅訪問 >

1) 蛸島町第6団地 9月17日(火)10時～12時

ささえ愛センタースタッフ1名に同行し3件の初回訪問、1件は不在であった。1件目は、80歳代高齢世帯、震災後、金沢市の長女宅で避難生活を送り、9/10 応急仮設住宅に入居された方であった。夫は強い腹痛と腰痛が続いており、鎮痛剤の効果が2時間しかもたず臥床時間が長くなっていた。現病歴、既往歴等の問診、バイタルサイン測定、腹部観察を行った結果、上部消化管内視鏡検査の必要があると考えられ、翌日の受診時に医師に相談するよう伝えた。

2件目は70歳代高齢世帯、夫婦ともに糖尿病があるがADLは自立され、健康上の問題はなかった。金沢市内の二次避難先から応急仮設住宅への入居となり、生活面ではIH調理器の火力が弱いことと火力調整がわからず困っておられ対応した。

2) 正院町第1団地 9月17日(火)16時～16時30分

前任者から申し送りを受け、80歳代の高齢世帯を訪問。認知症の妻は、デイケア外出中にて不在であった。夫の介護疲れが見られるという情報であったが、9/12 13 ショートステイを利用されゆっくり過ごせたこともあり体調は回復されていた。低いベッドに端坐位で長時間テレビを見ることが多いせいか膝の痛みがでてきたという訴えあり、時々体を動かすことと、翌日の定期受診時、医師に相談するよう伝えた。食生活は、ご飯は炊いているが、弁当、総菜、菓子パンといったものが多い。室内の清掃ができておらず衛生状態がよくないこともあり、生活状況についてささえ愛センター担当者に報告した。

<在宅避難者の巡回訪問>

1) 宝立地区 9月18日(水)15時20分~16時30分

在宅(被災高齢者等把握事業)要フォロー世帯2件を訪問。1件目は、60歳代男性独居、病歴が長く珠洲市総合病院を定期受診しているが、訪問時は隣家の縁側で男性4人のお茶会中であった。4月に自宅に戻った後、室内のカビの影響なのか鼻水と咳が一時ひどかったが、居室の部屋を変えてから症状軽減したと話される。下肢装具装着にて杖歩行だが、震災前に比べ散歩の距離が短くなったと体力低下を自覚されていた。2件目は、60歳代男性、中規模半壊宅で猫5匹と生活、糖尿病があり血糖測定やインスリン注射は自己管理できているものの、カップ麺や総菜中心の食生活で、直近の受診時に降圧剤が増量となっていた。家の1/3の柱がずれているが修繕や応急仮設住宅入居はしないという意向は変わっていないことを確認した。

2) 大谷地区(大谷町、馬縹町、笹波町) 9月19日(木)9時20分~11時45分

在宅(被災高齢者等把握事業)要フォロー世帯3件を訪問。1件目(大谷町)は、70歳代男性、自宅全壊にて隣家の納屋で生活中の方を訪問したが不在であった。2件目(馬縹町)は、60歳代男性独居、屋内の修理、片付けは終わり、日常生活の支障はなかった。持病もなく健康だが、震災により失業し職探し中だが年齢的、経験的に自分に合う職が見つからず、今後の経済的な心配を抱えておられた。3件目(笹波町)は、80歳代男性独居、難聴があり玄関先から呼んでも返事がなく、安否確認のため中に入るとテレビ視聴されていた。市街地に住む娘さんのサポート(週2~3回)を受けながら、「やっぱりここがいい」と言って、山間部の準半壊宅で自炊生活をされていた。屋内の建具の被害が大きい但未修理状態で、居間と玄関を仕切っている戸のガラスが割れ冬のことを心配されていたため、ささえ愛センター担当者に報告した。

<地域コミュニティ支援>

1) 宝立町第1団地集会所 宝立集う会

開催日時:9月18日(水)13時~15時 参加人数:12名

実施内容:お笑い体操、黒糖あんの白玉団子作り

応急仮設住宅入居中の女性のみでの参加で、新規参加者はいなかった。前夜の満月や珠洲での団子の作り方などの話をしながら全員で調理し、試食をした。その後、映像を見ながら体操をし、最後に雑談の時間を設けた。「他の地区では復興のまちづくりがどのように進められているか知りたい」、「宝立(地区)は家屋の解体はまだ終わっていないので、どう区画整理されてどうなっていくのか見えない」など語られていた。

2) 正院町第1団地集会所 いっぷくせん会ね(お茶会)

開催日時:9月19日(木)13時~15時 参加人数:12名

実施内容:お笑い体操、黒糖あんの白玉団子作り

初参加の方が1名(認知症があり息子さんによる送迎)あった。開始までの時間と白玉が茹で上がる時間を利用し、健康相談を実施、健康上特に気になる方はいなかった。試食後は、お笑い体操を参加者の希望で4回繰り返して行い、汗ばむ程度の運動をすることができた。

3) 正院町第1団地集会場:コミュニティカフェ

開催日時:9月17日(火)19時~21時 参加人数:5名

オブザーバーとして参加、若い世代のメンバーが集まり、正院町の復興に関する住民アンケ

ート及びまちづくりの会議の進め方、まちづくり協議会立ち上げに関する話し合いが行われた。住民アンケートは、珠洲市外で生活をしている住民も対象とするため、現住所の把握が課題となっていた。区長らの協力を得て配布し、集会場と公民館に設置する回収ボックスで回収するほか、本学会に対し巡回訪問時に声かけをして回収に協力してほしいと要望があった。アンケート結果等をもとに、今後若いメンバーが中心となって災害公営住宅のことを含めた復興まちづくりを考えていくことになるが、多様な意見が出てくることが予想されるため、専門家の提案も聞いてみたいという意見もあった。まちづくり協議会の組織化に向けては、担い手となってくれる人がいるだろうかという課題を抱えておられた。

4) 正院町第1団地集会場：第4回復興塾

開催日時：9月18日(水)19時~20時

参加人数：住民19名、行政2名、支援者6名、計28名

オブザーバーとして参加、最初に、野崎隆一氏(神戸まちづくり研究所)より、『まち(地域)づくり(自治)協議会』について」の講演があり、それを受けて復興まちづくりについての質疑応答が行われた。以下、その内容である。

9月20日に珠洲市復興計画策定委員会主催の懇談会があるが、住民として参加して意見を述べる機会ととらえてよいか。

「まちづくり協議会」の市としての定義は何か質問してください。まちづくり協議会には提案するという権限が与えられる一方で、合意形成が必要である。

市がまちづくり協議からの提案を受け入れてよくなった事例はあるか。

神戸市では事業計画に対し住民から反対意見がでたため、意見を住民にまとめてもらった。

まちづくり協議会が会議を行って意見をまとめ、事業計画の修正につながった事例がある。

別地区で行われた珠洲市復興計画策定委員会主催の懇談会に参加した際、懇談会は、意見を集約しインフラ整備等のマスタープランを作成するための会議という説明があった。

(珠洲市)珠洲市復興計画策定委員会主催懇談会は、3回開催予定。第1回は災害公営住宅建設等のまちづくりに関する意見を聞き、第2回は集約した意見をコンサルタントが絵に描きイメージ化を図る。まちづくり協議会が立ち上がった地区はまだなく、区長を通して主要な方に参加してもらっている状況のため、9月20日はまちづくり協議会のメンバーが参加されるとよい。懇談会を3回すると言ったが、家を再建しようとしている者もいる。3回のスケジュールを市はどのように考えているのか。自分達は年齢を重ねて時間がない、早く復興計画を立ててほしい。

年内に復興計画策定を目指しており、そのための3回の会議であるが、その後も区画整備など詰める必要がある。3回というのは年内のスケジュールである。

協議会は合意形成を図る場と話されていたが、情報伝達をきちんとしなければ一部の人のみで決めることになってしまう。神戸のまちづくり協議会の人、市外の避難者も含めてどのように情報を伝達し合意形成をしていったのか。

神戸のときは方法がまだ定着しておらず、県外にいる人には地域の情報の届いていた人と届いていない人がいた。意見集約には、アンケート、タウンミーティング、世帯別ヒアリング等の方法をとっていた。100%は難しいが近づける努力をした。

最後に、室崎益輝先生より、まちづくり協議会の4つの条件についての話があった。

行政からだけでなく、コミュニティからも皆に情報を伝えていくこと。

コミュニティ側から提案をする。行政の資金で専門家をつけてコミュニティの提案力を高める。合意を得るための手間は惜しまず、時間をかけたほうがよい。

全体目標を決めるのは行政、細かい部分は地域で決めていく。

正院地区まちづくり協議会が発足すれば、正院復興塾から協議会へ引き渡す動きになる予定である。

<避難所支援>

大谷小中学校 訪問日時：9月19日（木）10時～10時20分

避難者数14名（70歳以上3名、児童・生徒0名）訪問時、避難者2名が滞在、駐在している消防職員1名と団らんスペースで過ごしておられた。9月15日（日）に同避難所で実施したイベントの際、健康相談に来られた方だったため、体調の変化の有無を確認し、血圧測定の希望のあった1名のバイタルサイン測定を行った。

5. 支援活動を通しての所感と課題

応急仮設住宅の初回訪問を通して、高齢者が応急仮設住宅という新たな生活環境で暮らす中で大小の困り事があり支援が必要なことをあらためて感じた。また、在宅の方も、家屋の修理が進まない中で生活する不便さや雨天や冬季に向けた心配があるが、相談に至っていないケースがあった。引き続き、生活状況や健康状態の確認と併せて家の再建や修理についての意向を確認し、関連団体へつないでいくことが必要である。エリア会議での報告によると、解体業者に納屋に収納していた物を盗まれたという事案も発生しているため、屋内の修理を依頼するときも注意喚起が必要である。

街中は朝早くから作業現場に向かう工事関係の車両が走り、さら地も少しずつ増え、復旧が進行していることを感じる事ができた。地域コミュニティにおいては、復興に向けたまちづくりの話合いが進められていた。数年先、数十年先を見据えたわが町の姿を一人ひとりが考え、市外で暮らす住民も含めてそれらの意見を集約していくことは至難であるが、正院地区では、若い世代が中心となって住民アンケートを計画したり、まちづくり協議会の立ち上げに参画したりと、熱い思いをもって取り組んでおられることを知ることができた。正院復興塾では、講義を通してまちづくり協議会は合意形成が必要であるが行政に提案できる権限をもつ組織であることを共通認識され、今後、協議会を発足され復興まちづくりに向けて前進するだろうという期待をもつことができた。一方で、このような地区でも担い手不足の課題はあるため、けん引している方々が疲弊しないような支援体制が必要と思われる。

6. 写真



写真1. 正院復興塾



写真2. お茶会での団子作りの様子